《研修報告》第 77 回全国都市問題会議 in 長野

「都市の魅力づくりと交流・定住」

～人口減少社会に立ち向かう　連携の地域活性化戦略～

会場　長野市ホクト文化ホール（長野県民文化会館）

日時　平成 27 年 10 月 8 日(木)～9 日(金)

主催　全国市長会、公益社団法人後藤・安田記念東京都市研究所、交易社団法人日本都市センター、長野市

協賛　公益社団法人全国市長会館

［研修目的］人口減少が不可避であることが共通の認識となった現在、それぞれの地域の実情を踏まえた政策、施策が求められています。都市の魅力づくりについて、多彩な経験や研究成果を聞き、「交流と定住のあり方」、「連携の地域活性化」について考察する。

平成 27 年 10 月 8 日(木)

●基調講演「世界の山々をめざして」登山家田部井淳子氏

登山家田部井淳子さんは福島県三春町の出身です。東日本大震災での福島第２原子力発電所の事故後ご自分にできる事は何かと考え、そして行動されたエネルギッシュなお話でした。

避難所を訪問した時「1 日中何もする事がない」という呟きを聞いてハイキングを企画した事。絶望感に苛まれる福島の高校生を富士山登山に引っ張りだした事。また、お風呂に不自由しているのを聞いてハイキングに温泉をつけたことも、ご自身のポジティブな生き方と発想が原点なのだと思いました。

「女子だけで海外遠征を」を合い言葉に 1975 年エベレストに女性として初めて登頂されたころと変わりないパワーが溢れていました。

年齢を経て始めたシャンソンが「怖いもの知らずの女達」までになったお話も、チベットでのシェルパの数も、高校生登山のボランティアスタッフも、田部井氏の軽快な生き方、人を引きつける魅力にほかならないと感じました。

●主報告「活き生き『ながの』元気な長野」人口減少の克服に向けてオール長野の力を結集

長野県長野市長加藤久雄氏

長野は地域資源の宝庫ですが、それでも人口減少問題への対応は力を入れています。71 歳の自称新人加藤久雄市長は、６５歳から高齢者なんてもう過去のこと、これから高齢者にも生産年齢人口にはいってもらって長野を若者だらけにしていきます！と元気に宣言されていました。

未来は「待つもの」ではなく「つくるもの」人口減少を克服するためにこれまでにない発想を大切にし、勇気を持って新たに挑戦することが重要であるとの報告でした。

切れ目のない子育て支援ネウボラへの取り組みも始めていて、遊びながら子どもたちの身体づくりをするとの視点はプレーパークと同様だと思いました。会場の庭では最近注目されているジビエの屋台が出ていました。加藤氏の話に出てきたイノシシではなく鹿でした。

●一般報告

「都市の魅力づくりと交流・定住」人口減少社会に立ち向かう連携の地域活性化戦略

立教大学観光学部兼任講師、観光地域づくりプラットフォーム推進機構会長清水慎一氏

「観光地づくり」ではなく「観光地域づくり」とは、地域外の人の観光流入から生じる経済効果や誇りの醸成、生きがいの創造などの様々な効果を、地域のあるべき姿に向けた取り組みに生かす活動であると清水氏は定義しました。観光をキーワードに住みよいまちづくりを進めることは、これまでにあったものやことへの視点を少し変えてみることかなと感じました。

プラットホームとは人が集まる場所をつくり、連携協議する場、地域の中をつなぐ役割があります。

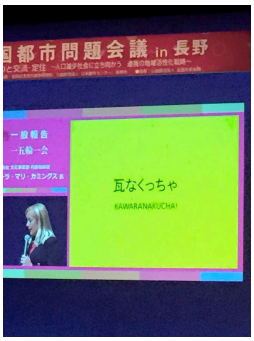
お年寄りの悩みと観光客の不満は一致している。という一言にマーケティングの本質が見えたように思いました。「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりはまちづくりでした。

●一般報告「地域資源を活かした連携によるまちづくり」愛知県豊田市長太田稔彦氏

愛知県豊田市は、製造品出荷額等が全国１位のクルマのまちであり、ものづくり中枢としとしての役割を担っていると同時に、平成１７年の合併により都市部と農山村（市域の７割）を併せ持つまちとなっています。そこで取り組んだのが、地域自治区制度「地域会議」です。「わくわく事業」や「おいでん・さんそん事業」等それぞれの資源を活かし自立をめざしています。「ミライの普通をめざす」そして、「We Love とよた」は未来への投資の表現からわかるようにフットワークも軽くチャレンジ感がいっぱいです。あるもの探しは、どこのまちでも必要な視点です。

ネーミングがユニークで楽しい仲間意識があります。年をとってもやることのある、期待されているシニア世代を担い手として地域から市を支える地域自治システムは、鶴ヶ島の支えあい協議会と似ていると思いました。

●一般報告「一五輪一会」株式会社文化事業部代表取締役セーラ・マリ・カミングス氏



セーラ・マリ・カミングスさんの話ははじめから終わりまで凄い勢いでした。数え切れないほどのアイデアが溢れてくる感じです。

「小布施ッション」に「瓦なくっちゃ」、また「ON の道より OF の道」など言葉に力があります。

長野オリンピックから活動されているそうですが、長野に来て魅力を感じて、ふるさと意識が醸成されて、とずっと住んでいると気がつかなかった良い所を外国から来た彼女が発見したようです。

これからの時代のお土産は物から経験に、とはプラットホームの清水氏と共通しています。そして、小布施マラソンのボランティア 2000 人は人を巻き込んでポジティブにしていく田部井氏と同じであると感じました。

地域づくりは繋がりをつくることが共通項です。

平成 27 年 10 月 8 日 9 日(金)

●パネルディスカッション

・コーディネーター

「都市の魅力と交流・定住」人口減少社会に立ち向かう連携の地域活性化戦略

一橋大学副学長同大学員法学研究科教授／辻琢也氏

・パネリスト

「多彩な連携による都市の魅力づくり」愛知県今治市市長／菅良二氏

「『里山資本主義』真庭の挑戦」日本の農山村モデルを目指して岡山県真庭市長／太田昇氏

「日本再生と地方創世の 7 つの処方箋」両備グループ代表兼CEO小嶋光信氏

「Jクラブと都市活性化」公共財としてのJクラブの重要性と魅力

信州大学全学教育機構期間教育センター教授／橋本順一氏

「トレードオフで考える」コンパクトシティは、人口減少を加速する

地域再生プランナー／久慈哲之介氏

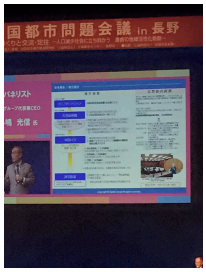
人は生まれ育ったところに、そして、今暮らす場所に愛着があります。というあたりまえのようで口にしない一言から始まりました。

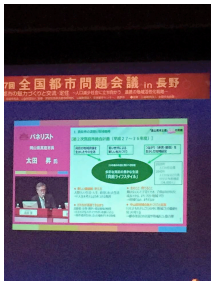
まちのアイディンティ、プライドの醸成。自分たちのまちに自信、誇りを持つことがパネルディスカッションの焦点であったように思います。人格形成で言われるマズローの法則を連想します。

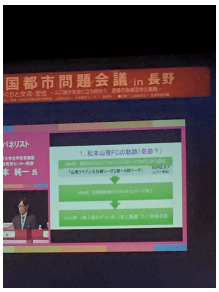
これからの時代、高齢者は地域の人材資源であるという視点は昨日来耳にしてきました。スポーツもひとりより仲間と取り組む方が効果があると言われています。ソーシャルキャピタルの重要性からも、高齢者が外に出かけるための地域公共交通は公のミッションです。

真庭市が計画づくりは市民運動として、高校生も含めた市民参加による若者のまちづくり

を進めている事を聞き、参加や連携の定義が既に市民間で共有されているのだと感じました。
　最後に、地域再生プランナー久慈氏の「8 割の利益を生み出す 2 割の顧客に依怙贔屓」という苦言で幕を閉じました。







〔研修所見〕
　住み続けたい、住んでみたいと思える魅力あるまちとはどんな姿なのかは千差万別です。一つは、何もない、から「あるモノ探し」に転じる事。外国の方から自分たちのまちの価値を教えてもらう事も多いですが、自分たちで価値を見いだす事が重要であると思いました。より多くの市民が参画し、まちをあるべき姿に近づけていく事が基本にあります。そのために市も議会もできる事は何かを考え行動していくことが求められていると感じました。

●　［行政視察］戸隠森林植物園、戸隠神社、そば粉製粉製造工場
　標高 1200 メートルの戸隠森林植物園は風が冷たくて空気が澄んでいました。JR の撮影にも使われているそうです。手入れはしているけど作った感があまりありません。湿地帯、散策路にチップを上手く使っています。森の学び舎は大きなログハウスです。幼稚園のお子さんが校外学習にきていました。
　パワースポット戸隠神社の中社を見学。天照大神のお話しの神さまです。
　お蕎麦の乾燥に 11 時間かかるそうなので、金曜の午後 3 時では製造工程は止まっていました。戸隠は荒れた土地だったことが幸いして、おいしい蕎麦がとれたのだそうです。「あるモノ探し」は昔からあったということになります。

●善光寺
　地域再生プランナー久慈氏の言う、善光寺前のレンタサイクルを見てきました。確かに、観光に来た方は駅からバスで仲見世まで行ってしまいます。駅前に何の表示もないので、せっかくの貸し自転車が生かされません。可視化はどんな情報提供にも重要でだと思いました。